日本紀廿九世丁天武天皇十年
夏五月

延喜四儀式曰
篤農丁褶廿
大織紫綿十疋四尺五寸

衣服令皇太子礼服条
深紫紗褶
○深緑紗褶

同親王諸王礼服条
深緑紗褶
○深縹紗褶

同諸臣礼服条
深縹紗褶

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

裳之部

○男裳

古事記上 十四 次 於二投棄御裳一所成神名時置師神

古事記傳六 四十七 和名抄ニ釋名云上曰レ裙下曰レ裳和名毛と
ゐり抑裳ハ女の着る物ゆゑ男のおそひゆゑ云ること
と古書ゐ見て見えざれば礼服はあるらめ鶏のまゐ此に御
裳の事なし云るハいとくゐふらし書紀ゐハ此に御裳と御
冠とのことゐ無し意ゐありてゐや

日本紀廿二 十 丁 推古天皇十三年閏七月己未朔 皇太子命二諸王諸臣一冠レ着レ裙

○深紫紗裙

衣服令 皇太子礼服条 深紫紗裙

○深緑紗裙

同 親王諸王礼服条 深緑紗裙

○深縹紗裙

同 諸臣礼服条 深縹紗裙

裳ハ 日本紀ニ 事記 傳ノ条ニ トアリテ 曳ニ トイヘルカ如シ 礼服ノ裳ハ 日本紀ニ トアル 裙 ヒラヒ ナリ 女体ノ制 衣服令ニ 皇太子ノ礼服ニ トアルテ ヒラヒ ナリ トアルテワヤナベレ

男ノ裳ハヒラヒトイヒテム

ヒラヒ ウヘミ ヒラヒ ウヘモ

又伯母トイフモノ男ノ名ニカリンモクリ 伯母ニ止メシ 男カ名ニ止メシ ヲノ名ニ止メシ ヲノ名ニ止メシ ヲノ名ニ止メシ

日本紀廿五 廿七 丁 天武天皇十年 裙 ヒラヒ 英人着

延喜内蔵式 四十 篇奥丁 裙 ヒラヒ 丹 大織冠 紫綾十尺 四尺五寸

裳之部

○男裳

古事記上 十四丁 次於投棄御裳所成神名時置師神

古事記傳 大 七四 十丁 和名抄ニ釋名云上曰裙下曰裳和名毛と
ゐり抑裳ハ女の着る物なれそれ男のおそひなと云ること
と古書ゐ見て見えざれ礼服ハあるとゐ鄭のまねびらの此に御
裳の事なと云るハいとくいふらし書紀ゐハ此に御裳と御
冠とのことハ無し意ありてなやや

日本紀 廿二 十丁 推古天皇 十三 月己未朔 皇太子命ニ諸王諸臣ニ浮ニ着ニ裙

○深紫紗裙

衣服令 皇太子 深紫紗裙

源氏物語 絵合 侍従も何やしきあびらきと取り加へ給へるなどやぎ
とれば色紙色々なりとり君にきとさとあひく

日本紀 廿九 廿七丁 天武天皇 十年 裙

夢ハ着

延喜内蔵式 四十 篇奥丁 裙 丹

大織冠 紫綾十疋 四尺五々

和名抄十二 衣服類 袴条 釈名云褶羯䩭和名宇波 襲也覆袴上之衣也

令義解 褶者所以加袴上俗云袴褶也

令集解 古記曰褶謂似婦人裳也褶訓枚帯

令抄 私案褶着袴上也今礼服中所謂裳也同御注曰裳裾廣五尺二寸裾廣二寸五分長二尺二寸三分

女官飾抄 ちびらいうえ裳の事なり男ハ袴の上よりきる女いらら裳の上よりきるなり褶と書なり

負儀 儀式三十五 大嘗祭儀 作次賜物部人等行列 日裝束云々 赤裳一腰 女子 袿下裳一腰 赤薄機引下裳一腰云々

雜令 凡官人位禄以上毎年給衣服者布衫袴衫裙各一具皆隨長短量給

續日本後紀 承和七年 初頃着鳳冠繞偏冊幣相屬省貴之術依約是憲宜自今以後女官服裳裏之表紗冬用裙不節貴賤一切禁断一裳之外不得重著方幾亡適准制禁断

延喜弾正式 凡婦人除裳不節貴賤二裳之外不得重著單裳不在制限

僧馬裳 古事記 年敏七上利反天美也知加与波子

同物門 和可久止不和加止 亦年波也乃獨留奴礼之天也乃奉留奴礼

トトリ廿人令修理之人ハコレ也ヒトヒ男士 ハ男ノ子ノ男ノ子ノ男ノ子ノ

和名抄十二 衣服類 袴条 釈名云 褶 羯 和名抄 宇波 本朝令 襲也 覆袴上之衣也

令義解 褶者所以加袴上 俗云袴褶也

令集解 古記曰 褶謂似婦人裳也 褶訓枚帯

令抄 私案 褶着袴上也 今礼服中所謂裳也 同御注曰 裳裾廣五尺二寸 裾廣二寸五分 長二尺二寸三分

女官飾抄 おびらいうえ裳の上よりきるなり 褶と書れり

貞観儀式三 十五 打 踐祚 大嘗祭儀 次賜物部人等行列 曰 裝束 云々 衣裳一腰 女子 袿下裳一腰 衣 薄機 引下裳一腰 云々

雜令 凡官戶奴婢正丁 載以上 毋 給衣服者布衫 袴 衫 袴 各一具 皆隨長短量給

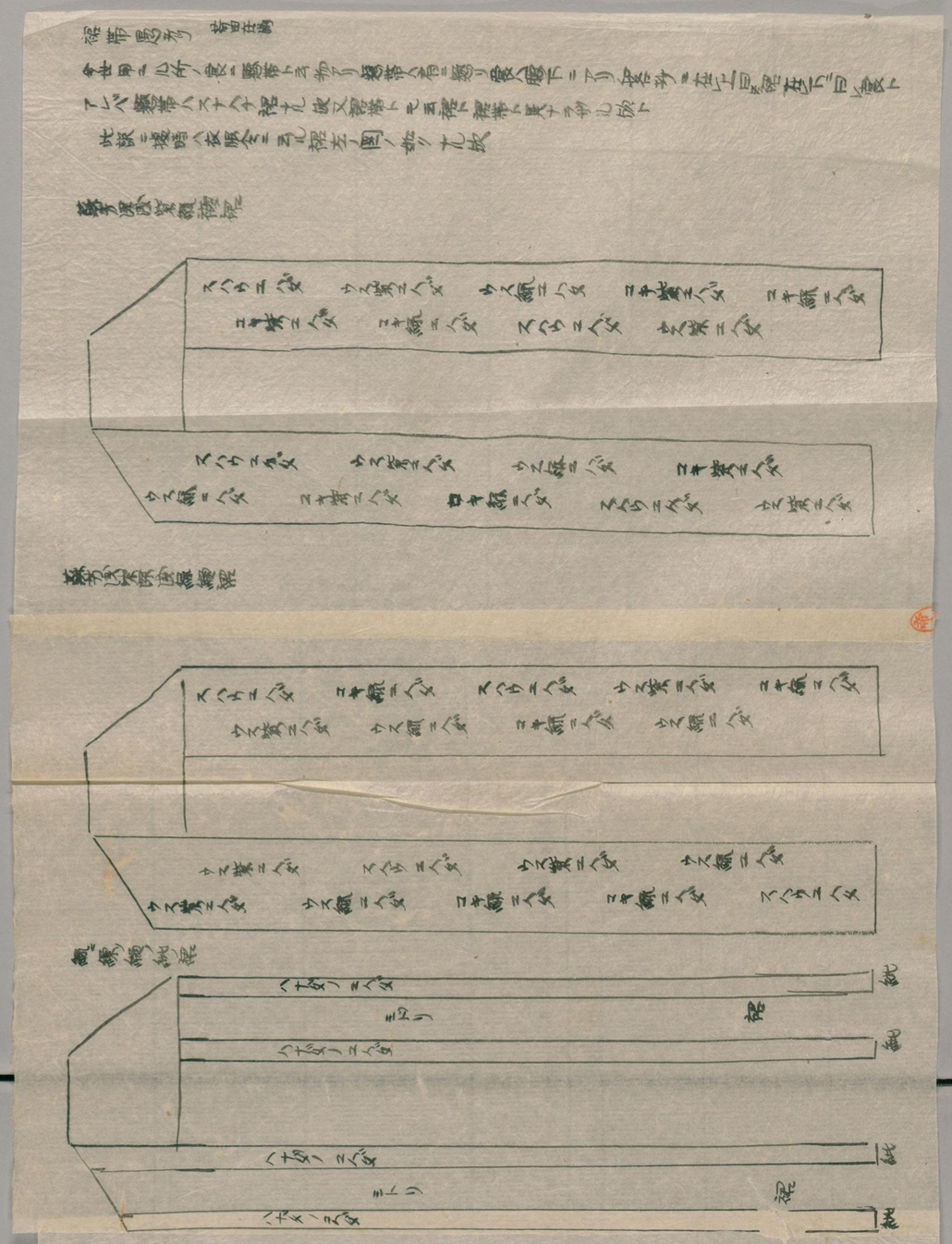
續日本後紀 天長七年 初頃者屢倍 諸偏 嗣 幹 相爲自貴之術 依約 是 宜 貴賤以後女所服裳 裏之 表 紋 冬 袴不節貴賤一切禁断 一裳之外不得重著 若敢違犯 制禁断

延喜式 正式 卅三 凡婦人給裳不節貴賤二裳之外不得重著 單裳不在制限

倭名類聚抄 古事記 宇波 七上 利良 又 美也 知加多 俗 字

同 内 礼 和可久止 布 知加止 布 宇波 也乃 倭 宮女礼之 布 也乃 倭 宮 奴 礼

ナトリサナ 令 倭 ハコレ 宮 ハコレ 吉 ハコレ 宮 ハコレ 令 ハコレ 宮 ハコレ 令 ハコレ 宮 ハコレ 令



国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用　挟み込み物

潛裙

荷田在滿云、裙ノ字ノ所謂裙ハ今ノ婦人ノ裳也何如トナレバ衣服令集解ニ裙ハ今ノ婦人ノ裳ニ似タリト云條注問ノ外ニハ直ニ今ノ婦人ノ裳ナリトカリ

同　本朝ノ裙ノ制考ヘ難シトイヘドモ其形狀裳ニ似タルベシ何如トナレバ和名抄ニ説文ヲ引テ在上曰裳在下曰裙ト載セ延喜式ニ上裳下裳トアリテ裙ヲモ上裳ト称ルト見エタリ然ベバ小子同カラザル所アリトモ大ニ異ナルベカラズ矣

貞觀儀式ニ大嘗祭條中　赤裳一腰

裙帶

荷田在滿云、裙帶ハ裙ノ紐ナルベシ古ハ裙ヲ用ヰタルヲ中古ヨリ裙ヲ去テ唯其紐ノミヲ帶トテ用ヰタルカ何如トナレバ中古以前裳ヲ載タル書ニハ裙帶見エズ中古ニ至リテ裙帶ヲ載セタル書ニハ裙見エズ　今ノ裳ノ腰帶ハ初メ裳ニ屬セル物ニハ非ズ何如トナレバ其色裳ト各別ナリ裙ヲ畧セルニ依テ其紐ヲ其裙帶トテ裳ニ付タルナルベシ何如トナレバ其大帷子襲等ノ類ベカリヲ畧セテ付ル例アリ

梁塵愚案抄 催馬樂何ノ下

令集解　冗云女裙服裙ノ上ニ耳跡云婦女服裙裙男ノ裙ハ表ノ袴ノ上女ノ裙ハ先着テ裙而纈ノ裙裁ミテ所裙下ノ褌頭ニ也纈裙与純裙一同言耳明也古記云裙男一種唯男ハ上而袴顯出服之婦ハ裳一種下服之也成云女ノ裙俗云引下裙着裙中着總之ノ裙中在

うちとをひらとをいふ裙也

○襪芳保伐紫綾纈裙

衣服令　内親王一位女王内命婦礼服条　襪芳保伐紫綾纈裙

○襪芳保伐紫綾纈裙

同　女王内命婦二位以下五位以上礼朝服条　襪芳伐紫綾纈裙

○纈纈纈純裙

同　大位以下内命婦朝服条　纈纈純裙

○紅裙

同制服　紅裙

○深伐紫裙

延喜彈正式　凡深伐純裙者聽庶女以上通着

○白裙

延喜縫殿式　御服春季条中　衣袷裙二腰白一腰夾纈兎　下裙三腰白

○青下濃裳

同　十八丁　綠裙一腰綠表帛裡別三丈

西宮記　陪時ハ女裝束　青下濃裳

○目保裳

同　目保裳

○下濃裳

西宮記　陪時ハ女裝束　下濃裳

御ちはやしまいでませるとき　ほうしまいでませるとき　御ひらひをおろせるとき

我ちはやぶるかみのみよの　ほうしのはの緑ほうしのはの

ちはやぶるかみのみよの　ほうしのはの　緑ほうしのはの

東日記　天子緑下裳　○赤帝徴引下裳一腰

○赤帝徴引下裳一腰

○赤帝徴引下裳一腰

裙

荷田在満云、裙ハ今ノ所謂裙ハ今ノ婦人ノ裳也、何如トナレバ衣服令集解ニ裙ハ今ノ婦人ノ裳ニ似タリト云、除禅門ノ抄ニハ直ニ今ノ婦人ノ裳カトアリ

同　本朝ノ裙ノ制ヲ考ルニトイヘドモ其形状裳ニ何如トナレバ和名抄ニ説文ヲ引テ在下曰裳ト載セ延喜式ニ上裳下裳トアリテ裙ヲモ上裳ト称ルト見エタリ然レバ小シ同ジカラザル所アリトモ大ニ異ナルベカラズ矣邦ノ裙法服、裙皆裳ニ類セリ

貞観儀式三大嘗祭儀中　赤裳二腰

裙帯

荷田在満云、裙帯ハ裙ノ紐ナルベシ古ハ裙ヲ用ヰズシテ中古ヨリ裙ヲ去テ唯其紐ノミヲ帯トテ用ヰルカ何如トナレバ中古以前裳ヲ載セズシテ裙帯ヲ載セタル書ニハ裙見エズ　今ノ裳ノ腰帯ハ初メリ裳ニ属セル物ニ非ズ何如トナレバ其色必裳ト各別アリ裙ヲ畧シテ裳ニ付ル例アリ

梁塵愚案抄（催馬楽何ノ下）

令集解　冗云女裙服裙ノ上ニ耳跡云婦女服裙裙男裙表袴上女裙先着裙而纈裙裁ニシテ而裙下端頭也纈裙与純裙一同言耳明也古記云裙男一種唯男上而袴顕出服之婦裳一種下服之也戒云女裙俗云引下裙着裙中着総之裙中在

○襖芳保伐紫綾纈裙　表裙下裙

衣服令（内親王一位女王内命婦礼服条）　襖芳保伐紫綾纈裙

○襖芳保伐紫綾纈裙

同（女王内命婦礼服二位以上朝服条）　襖芳伐紫深伐綾纈裙

○纈纈纈純裙

同（大位以下内命婦朝服条）　以上纈纈純裙

○紅裙

同制服条　紅裙

○深伐純紫裙

延喜弾正式　凡深伐純裙者聽庶女以上通着

○白裙

延喜縫殿式（御服春季絣中）　衣袴裙二腰白一腰夾纈元　下裙二腰白

○作目摺裙

同（十一月中宮絣中御服夏季条）　羅裙二腰白一腰夾纈元作目摺一腰摺一腰

○支子染下裳

貞観儀式（三大嘗祭儀中）　支子染下裳一腰

○赤薄機引下裳

同（同赤薄機引下裳一腰

○緑裙

同（同十八丁）　緑裙一腰緑表帛裡別三丈

○青下濃裳

西宮記（臨時八月女装束）　青下濃裳

○目染裳

同（同目染裳

○下濃裳

西宮記（臨時八月女装束）　下濃裳

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4　ガラス使用

腰裳

古事記中 廿九丁 崇神天皇巻

服腰裳少女

同傳廿三 六十丁 姓氏錄ニ葛木襲津彦命男腰裙宿禰と云人

名もなれば古然云服の名なりし扨て其々尋常の裳

といへ別物なりはと常の裳を然るも云しら其差い詳あらざ

別記ニ久安大年正月十日女御入内同廿二日女房衣色目

白衣五領織打衣掛織物表者蒲萄染蒲萄染織物唐衣裳腰裳まと

三月五日臨時祭打出云々蒲萄染織物唐衣疑冬腰裳とあり此他

もとあの つねの裳を云るら別物ら考へ及ばゆゆしく考へ及ばず

あの記錄ふ文いみも此名見えと今為しら

る得思出ぶ文いみも此名見えと今為しら

を以て引出つて上代ハ渾を母と云つるらとおびしき事なる

れば其ハ別とおもめに表ハ著る裳をば腰裳とも云りし

まやならおも但万葉の哥などハ俗て思ふに古へハ裳ハ女の

物しなべて服ありし物あるハ此ハ此を服とはこゝを殊

ハ云物ハ尋常の裳ハ非るが故ら又思ふハ此ハ此記ハ

も共ハ少女と書き童女とも書紀ハ書れ為ればいはゆる

き女なるべしはて後世に女ハ裳著とく初て此ハ服ハ儀

のある為思へば上代ハも童女のみどハ裳ハ服ざりしこ

となるハ此少女の服てあるハ尋常のまとひハ非る故こ

殊に云るハもやならおも此物の事ハほよく考ふべし

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

服色部

服色用冠色

服色に付賤貴別

○衣之部

古事記上 縫之 次於授葉御衣所成神名和豆良比能宇斯能神

古事記上 神代 久路岐美祁斯云々 阿遠岐美祁斯云々 阿多

服色

左都岐曽未紀賀斯流 迩斯未許呂母 遠森都夫佐迩登理與曽

比云々

古事記傳十一 衣服色の御制の次第い大抵らら国の隋唐

の制にならへる物なれども上代よりもれのぼらら人の

尚み好む色と軽しめ忌む色との次第い然ありて此方も

彼方も似さりとむ又彼の国の古ふ代ごとふ各尚む色の

有しい強て定めしゆらしゆごとなれがそい中々に云ふ

足らず

日本紀廿一 紫微天皇 河内国言於餌香川原有彼斬人計將數百

頭知既闌姓字難知但以衣色收取其身云々

日本紀廿二 推古天皇十六年八月 唐客於海石榴市衢 是時皇子諸王諸臣悉以

五位以上婦下得著夫服色

天皇喪服

服色等差

○借紋

禁服色違越

礼服朝服之色緣舊例

坡非蹇使當色之外着雜色袍

下聽禁色為下衣

礼服色違盤

全髻華著頭、亦衣服皆用錦紫繡綾及五色綾羅、一云服色皆用冠色云々

續日本紀二 文武天皇大宝元年十二月制 五位已上婦、不得著夫服色、但朝會之日、聽著得色已下、

衣服令 凡天皇為本服二等以上親喪、服錫紵、為三等以下及諸臣之喪、素帛衣外通用雜色、

同 凡服色白黄丹紫綠芳緋紅黄橡纈補蒲綠紺縹紫黄橡墨如此之属、富色以下各兼得服之

○

續日本紀卅七 桓武天皇延暦 内親王及内外命婦、服色有限、下得僭差、此未所司寛容、曾不禁制、至于閭閻肆廛、恣養禁色、既無貴賤之殊、本末顛倒、等差之序、自今以後、宜最禁断、如有違越、寡以常科、事異別式、

日本紀略 神亀六 所載孔丘九 朝會之礼及常所服者、又早逢貴而既等、不論男女、改依唐法、但五位已上、礼服諸朝服之色、衛仗之服皆緣舊例、不可改張、

續日本後紀八 仁明天皇嘉祥元年十七月勅 令坡非違使當色之外、着雜色袍

三代実録十八 清和天皇貞観十二月制 不聽禁色為下衣、

延喜弾正式 凡文武官人以下把笏番上以上、八位以下之輩、每年待式兵両省、移遣忠等、本司紀弾其服色違盤上

○白

古事記上 火遠理命御謂 阿加陀麻波。袁佐閇比迦礼杼。斯良多麻能。岐美何余曽比斯。多布斗久阿理祁理。

同下 雄略天皇御謂 斯漏多閇能。禊互岐禊那布。

喪葬令 凡天皇為本服二等以上親、喪服錫紵、為三等以下及諸臣之喪、条帛文十尺、用生絹

○黄櫨

日本記 日本逸史廿 巻所載 弘仁十一年二月甲戌詔曰云々朔日受朝、同日聽政受蕃国使、奉幣帛反大小諸會、則用黄櫨染衣、

西宮記 正月 紅四 蔵人奉御笏依式天皇服黄櫨

同 臨時 紅大 大嘗會御禊日装束天皇服黄櫨

同 同正月 七日条 天皇服位御服

同 同正月 大日条 十 天皇御服同七日

同 同 射礼条 十七日 天皇御服同七日

江次第 石清水臨時祭御禊出御黄櫨御前座出御 麹塵舞出御 出衣色 又改

同 立太子夏王御南殿位袍

装束抄 御装束 中事条 尋常、黄櫨染、竹半臂下重打衣 略之 常事也 袍単 普通表袴 襲地 大口也 袍一ッ常事也 二ッ本也 半臂黒下襲 打袋皆文小葵襪無文帯、尋常有文、玉夏、張単半臂下襲云々

餝抄上 天子常着御禰黄櫨染文竹桐鳳凰麒麟 櫨染御袍 鄭蜀御下襲黒御半臂縮天養二十一朔旦旬主上黄櫨染御袍

雅書縫製式 雅楽寮明 黄櫨綾 一疋櫨十四斤 横方十二斤 酢二升 及斜靳八荷 帛二疋 紫十五斤 酢一升 及一斜靳 罰荷

江次第 御元服皇帝着黄櫨文服袍打横方下重等事 糸縫五々 生頭黒横出御矣 御座

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

○白

古事記上 豊玉毘賣命歌 阿加陀麻波。袁佐閇比迦礼杼。斯良多麻能。岐美何余曽比斯。多布斗久阿理祁理。

同下 雄略天皇御謌 斯漏多閇能。薄互岐薄那布。

喪葬令 凡天皇為本服二等以上親喪服錫紵為三等以下及諸臣之喪除帛衣外通用雜色

令集解 釈云我朝以白色為貴色天皇服也

令抄 令御注曰私案白御衣女帝御服也故置黄丹上欤

日本記 日本逸史 八卷 呼載 弘仁十一年二月甲戌詔曰云々其朕大小神事及李冬奉幣諸陵則用帛衣云々皇后以帛衣為助祭之服云々

按 壹井氏云帛衣天皇正服定令條之時未有黄櫨染也嵯峨天皇御宇黄櫨御袍始之後以帛衣為神事之服御猪者也

西宮記 臨時四 女帝御装束皆白

同 臨時八 后即位日上髪着御白綾衣裳

○黄櫨

日本記 日本逸史 八卷 呼載 弘仁十一年二月甲戌詔曰云々朔日受朝旦聽政受蕃国使奉幣帛及大小諸會則用黄櫨染衣

西宮記 正月 紅四 蔵人奉御笏依式天皇服黄櫨

同 臨時 八 大嘗會御禊日装束天皇佐服

同 正月 七日条 天皇服佐御服

同 正月 大日条 十 天皇御服同七日

同 十七日 射礼条 天皇御服同七日

江次第 石清水臨時祭御禊出御黄櫨御前座出御麹塵舞出御 出者色改

同 立太子夏至御南殿佐袍

禁抄 抄中 御装束 尋常黄櫨染 竹半臂下重打衣 署之 帛袍 普通表袴 露地 大口也 袍一ッ常事也 二ッ本也 半臂黒下襲 打袴皆 文小葵襪 無文帯 尋常有文 玉夏 張帽 半臂下襲云々

餝抄上 天子常着御禰黄櫨染文竹桐鳳凰麒麟 櫨染御袍 鄭蜀御下襲黒御半臂縮

雜書 雜事 雜部 黄櫨綾一疋 櫨十四斤 蘇芳十斤 酢二升 巫 斜靳八荷 帛一疋 紫十五斤 酢一升 巫 斜靳四荷

江次第 御元服皇帝着黄櫨欠服袍打袴方下重等事 糸縫五々空 後黒横出御笏 御座

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

○黄櫨

日本記 日本逸史 廿 弘仁十一年二月甲戌詔曰云々朔日受朝日聽政受蕃国使奉幣反大小諸會則用黄櫨染衣

西宮記 正月紅四 蔵人奉御笏依式天皇服黄櫨

同 臨時 紅大 大嘗會御禊日裝束天皇佐服

同 同七日 紅月 天皇服佐御服

同 同正月大日条 十 天皇御服同七日

同 同十七日 天皇御服同七日

普通 表袴 叢地 大口也 袍一ッ 帝事也 二本也 半臂黒下襲皆 文小 裘 機無文 帯 尋常有文 玉 夏 張 畢 半臂下襲云々

古事記上 豊玉毘賣命献海神命詔 阿加陀麻波 袁佐閇比迦礼杼 斯良多麻能 岐美何余曽比斯 多布斗久阿理祁理

同下 雄略天皇御詔 斯漏多閇能 蒭互岐蒭那布

喪葬令 凡天皇為本服二等以上親喪服錫紵為三等以下及諸臣之喪除帛衣外通用雜色

令集解 釈云我朝以白色為貴色天皇服也

令抄 令御注曰私案白御衣女帝御服也故置黄丹上欤

日本記 日本逸史 廿 弘仁十一年二月甲戌詔云々其朕大小神事及李冬奉幣諸陵則用帛衣云々皇后以帛衣為助祭之服云々

按 壹井氏云帛衣天皇正服定令條之時未有黄櫨染也嵯峨天皇御宇黄櫨御袍始之後以帛衣為神事之服御渚者也

西宮記 臨時四 女帝御裝束皆白

同 臨時八 后即位日上髪着御白綾衣裳

按 こゝに記る白衣は表裝ゐしくゐはあしへ平日の服は貴賤ともゐ染ざる素衣をぞ著たりける其は天武天皇紀ゐ道俗の字城ゐこゐひゞと云ろきぬとよみ持統天皇紀の還俗を云ろきぬゐらへをと訓み續日本紀の詔詞ゐは出家人も白衣も相雜天と云るまて云られとりされバ令制ゐる無位の人の黄袍城著るも家人奴婢の橡墨衣城著るも朝廷公事ゐ仕ふる時と事と云る時の表裝ゐり又後ゐは雜色者持等は白張上下城著る事ゐなれりこは松の落葉日本書紀私傳ゐはいさゝらに城まじへていへる私り

線綾表御袴

胡曾抄 黄櫨染冬御袍黒半臂襖芳御下襲綿綾也 打袍紅羅縮
線綾表袴 案霰有文巡方帯 或御門云 牙笏夏御袍 生黒半臂襖芳御
下襲紅羅御表袴 冬同 有文巡方帯 牙笏

日本後紀廿四 弘仁十年 大門紋 禁女人着褐及黄櫨染等色唯節會日
不在禁限

冠服考 黄櫨染は天皇の御位袍あり日本紀略云弘仁十一
年二月甲戌詔云其服云々朔日受朝同聽政受蕃国使表弁
幣及大小諸會則用黄櫨染衣とあり此色い首唐書輿服志
云唐制天子衣服中略其常服赤黄袍あと唐大典云自隋文
帝制柘黄袍及巾帯以聽朝至今遂為常とまと事物紀原云二
儀実錄唐武德初用隋制天子常服黄袍及衫後衛用赤黄遂
禁止士庶不得服其事自唐神堯始也後曰緒黄王建宮詞曰
日色緒黄相似謂赤黄也まと山堂肆考曰唐新志天子袍衫
皆用赤黄遂禁臣民服まと同書曰欝金袍御袍也唐詩日華
浮動欝金袍などい見えとる 唐の夏絢の嘉話錄は舊官人所服緒黄紫二色貞觀中始令

三品已上服紫四品五品以朱六品七品以緑八品九品以青
とあるは依此ば緒黄の天子の服とのみなりとする貞觀
以来の事故玉篇に緒黄の唐時文武官三品以上中略其衣紫なる
為上緋次之緑為下とあるこれ貞觀以来の事をさせるなり
にる柘當作緒著緒黄謂簡天子副史著柘黄と見えとれどそれ註
説文の誤りなるべしさり云る黄櫨は同じきあり参語集
に四時事晨朝是日始出ヲ云ナリ其色赤黄也如日暉
トイフハ此色ナリと見えて天皇の御衣い和漢とも此日
の色なるつしるものなり仍て是を佐袍ぞいふさるい
紅家次第黄櫨御袍の事故雲圖抄ゐ佐袍御束帯とかれる
るく知るべし然るに制変通ゐ丘瓊山云天子服黄始于隋
後遂因之以為常と見え其外上件ゐ引る如く漢籍の中に
黄袍といへるい皆天子の服なれど此天子の佐衣色の黄
い常の五色の黄とい異なて黄ゐ赤ゐの交りとる色あり
全く参語集ゐいへる如く日暉の赤黄あるゐ同じ色なて
唐詩ゐ曰華浮動とつくれるも是ゐ依てなり大典ゐ柘黄
とあるも緒黄ゐ同じくれ心漢土の天子の袍色と天皇の
御袍の色とかゝ事なく共ゐ黄櫨染あり古歌ゐ櫨黄葉

と詠る櫨の黄葉なりてもおほゝさ此色しらるきで訓をも和名抄よりて彼志の御衣とゝ彼志の御衣とゝいわづし日本紀に朱華と黄櫨とを合せ用ゆるハ非なり同色のやうなれハ然るなとの黄櫨と麹塵とを同色と心得て裝束抄あどの如き俗書に麹塵天子常に召ふ物黄櫨染トモ称スとゝいつるハ大なる誤なり黄櫨染ハ天皇の外是を着ゞ續深憲抄ハ臣下の嫌ある事あきらさゝ所なるこゝとゝ見ゆ麹塵ハ天子より始て士庶人まで皆と処を着る其ゝ所次ゝにいつり

○帛一疋紅花大七斤支子九斗酢七斗麩四斗稾三圍薪一百廿斤羅一疋用度同帛絁一絢紅花大二斤八兩支子三斗酢二斗三合麩二斗稾一圍薪大十斤

○黄丹

衣服令皇太子礼服条 黄丹衣

令抄 令御注曰黄丹以紅花支子酢麩交染

日本紀略日本逸史載ハ皇太子従祀及元正朝賀可服冕九章望入朝元正受群官若官臣賀及大小諸會可服黄丹衣

延喜縫殿式雜染用 黄丹綾一疋紅花大十斤八兩支子一斗二外酢一斗麩五外稾四圍薪一百八十斤。

法曹至要抄中 元慶五年十月十四日宣旨云式云凡支子染色可濫黄丹者不得服用者而李来以茜紅交染色自今以後茜若紅交染支子者不論浅深宜加禁制者

案之着色時雖禁制重延未之作法或称疑冬色着用之或號黄朽葉色着用之以下男女任意隨望亦無禁制之

延喜弾正式 凡支子染色可濫黄丹者不得服用

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

○帛一疋紫草卅斤酢一升灰一石八斗薪三百斤羅一疋紫草卅斤酢一升灰三石薪三百斤絞紬一疋紫草十五斤酢三合灰四斗六升薪一百廿斤練一絇紫草十七斤酢二合灰三斗五升薪六十斤黄布一端紫草五十斤酢一升灰一石二斗薪三百十斤葛布一端紫草九三斤酢三合灰一斗七升薪六十斤しかし三切の紫草の量は[illegible]

○紫

深紫

日本紀廿五孝德天皇大化三年制 大小織冠大小縫冠服色並用深紫

同廿九天武天皇十四年制 正位深紫

衣服令親王四品以上諸王諸臣一位朝服深紫

日本後紀廿[illegible]仁元年制 大臣身帯二位者聽著中紫今亟改著深紫

延喜縫殿式雜染用深紫綾一疋紫草卅斤酢二升灰二石薪三百大十斤○

四季草 深紫といふハ紫の色甚深くして黒くなりたるをいふとゝへば茄子の色の如し茄子の色ハ紫の色深くて黒く見ゆるあり子[illegible]

黒紫

日本紀卅四持統天皇年制 浄大壹已下廣貳已上黒紫

[illegible]二[illegible]文武天皇元年制 大親王四品已上諸王諸臣一位者黒紫

○中紫

廿[illegible]天皇元年制 諸王二位已下五位已上及諸臣二位三位者依令條著浅紫今改著中紫

○冠服考

いへるハいとしき誤あり政事要畧ゴ殘紫雖讃青古老橡黒紫と云り縫殿寮式を考るに深殘紫綾一匹紫草八斤酢二升灰一石薪百廿斤と見えて深紫ゴ少しばかり薄くて猶深きゴとに依れる色なり中畧殘紫と黒紫とハ同色吳各ゴて深紫浅紫の中なる色ゆゑに日本後紀大同四年二月丁巳有敕聽右大臣従二位藤原朝臣内麻呂著中紫朝服また同紀弘仁元年九月壬戌制大臣身帯二位者聽著中紫又諸王二位已下五位已上及諸臣二位三位依令條著浅紫今改著中紫と見えたる中紫が即ち殘紫ゴてこれ黒紫ゴ

隋礼儀志 大業元年煬帝詔令洪字文愷等創造章服差等五品以上通著紫袍六品已下兼用緋綠晉束以青英以白屠商以白十年以黄

杜氏通典 以紫緋綠青為食服唯於隋帝巡遊之時而其制遂定於唐

唐書馬周傳 三品服紫四五品朱六七品綠八九品青

佐三位者依令條著浅紫今改著中紫

日本紀廿五孝德天皇大化三年制 大小紫冠服色並用浅紫

同廿九天武天皇十四年制 直位浅紫

○帛一疋紫草卅斤酢一升灰一石八斗薪三百斤羅一疋紫草卅斤酢一升灰二石薪三百斤綾紗一疋紫草十五斤酢三合灰四斗六升薪一百廿斤練一絇紫草十七斤酢二合灰三斗五升薪六十斤黄布一端紫草五十斤酢一升灰一石二斗薪三百十斤葛布一端紫草九三斤酢二合灰一斗七升薪六十斤

○紫

深紫

日本紀廿五孝德天皇大化三年制 大小織冠大小繡冠服色並用深紫

同廿九天武天皇十四年制 正位深紫

衣服令親王四品以上諸王諸臣一位礼服朝服 深紫

日本後紀廿 嵯峨天皇弘仁元年制 大臣身帯二位者聽着中紫今夏改着深紫

延喜縫殿式雜染用 深紫綾一疋紫草卅斤酢二升灰二石薪三百大十斤○

四季草 深紫といふハ紫の色甚深くして黑くちりたるをいふとゝへば茄子の色の如し茄子の色ハ紫の色深くて黑く見ゆるあり子

黑紫

日本紀廿四時統天皇制 澤大臺已下貴賤已上黑紫

續日本紀二 文武天皇大宝元年制 親王四品已上諸王諸臣一位者黑紫

日本後紀廿 嵯峨天皇弘仁元年制 諸王二位已下五位已上及諸臣二位三位者依令條着浅紫今改着中紫

○冠服考 黑紫を日本紀通證に即深紫又云濃紫といへるハいとゝしき誤あり 政事要畧に殾紫雖讃青古老傳黑紫とあり縫殿寮式を考るに深殾紫綾一匹紫草八斤酢二升灰一石薪百廿斤と見えて深紫に少しばかり薄くて猶深きゝとに依れる色なり中畧殾紫と黑紫とハ同色矣各まて深紫浅紫の中なる色ゆゑに日本後紀大同四年二月丁巳有敕聽右大臣従二位藤原朝臣内称臣着中紫朝服また同紀弘仁元年九月壬戌制大臣身帯二位者聽着中紫又諸王二位已下五位已上及諸臣二位三位依令條着浅紫今改着中紫と見えたる中紫ハ即ち殾紫まてこれ黑紫なり

浅紫

日本紀廿五孝德天皇大化三年制 大小紫冠服色並用浅紫

同廿九天武天皇十四年制 直位浅紫

隋礼儀志 大業元年煬帝詔牛洪宇文愷等創造章服差等五品以上通着紫袍大品已下兼用緋綠一昏夷以青袞以白屠商以白十年改黄

杜氏通典 以紫緋綠青為食服唐於隋帝巡遊之時而其制遂定於貞

唐書馬周傳 三品服紫四五品朱六七品綠八九品青

○帛一疋紫草一五斤酢一外五合灰五斗薪六十斤羅一疋用度同帛
綾紗一疋紫草五斤酢六合灰一斗二外薪六十斤綿帛
一疋紫草五斤酢一外灰二斗
五外薪六十斤絁一絇紫草
五斤酢三合灰一斗薪三十斤
黄布一端紫草七斤酢八合
灰一斗八外薪六十斤葛布
一端紫草一七斤酢六合灰一斗
五外薪六十斤

○帛一疋紫草八斤酢一外灰一
石薪百廿斤絁一絇紫草八
斤酢三合灰三斗薪九十斤

同 世持統天皇 制 淨大参已下賛肆已上赤紫正八級赤紫

續日本紀二 文武天皇 三年制 大 諸王一位以下諸臣三位以上皆赤紫

衣服令 諸王二位以下五位以上諸臣二位三位礼服朝服 淺紫衣

延喜縫殿式 雜色用度条 淺紫綾一疋紫草五斤酢二外灰五斗薪
綿絁絹細 支絁布同
六十斤。

四李草

淺紫八常の紫なれて今世に京紫といふ色
なり

蛙抄 紫親王及諸王五位以上諸臣三位以上着之其色有淺
深但今世諸臣一位以下三位以上所用之袍其色黑カネシ須
謂之紫乎而無淺深之差

滅紫

延喜雅正式 凡滅紫色者参議以上聽通用五位以上聽着半臂

深滅紫

延喜縫殿式 雜色用度 深滅紫綾一疋紫草八斤酢一外灰一石薪百廿
斤。

削去

○帛一疋紫草八斤酢七合灰七
斗薪九十斤絁一絇紫草七
斤酢二合灰一斗五外薪九十斤

中滅紫

同 中滅紫綾一疋紫草八斤酢八合灰八斗薪九十斤。

淺滅紫

同 淺滅紫絁一絇紫草一斤灰一外薪三斤

純紫

延喜雅正式 凡深淺純紫袍者聽女女以上通着

蒲萄

日本紀廿九十四 天武天皇 紫

延喜大神宮式 神宝料

令義解

延喜彈正式 奴婢服紐

延喜縫殿式 雜染用

追住ハ深蒲萄 進住ハ浅蒲萄

深蒲萄 染浅蒲萄

蒲萄紫色之最浅者也

蒲萄

蒲萄、綾一疋 紫草三斤 酢一合 灰四 外薪廿

十斤 帛一疋 紫草一斤 酢一合 灰三 外薪廿

貞文雜記五 ・紫色ハ今世ニ云紫ト云色也 蒲萄ハ今世ニ云紫ト云色也 紫ト云色也

ソレトツテ云ク 花蘭 蒲萄ハ紫色 牡丹 ソレハ蒲萄色ナリ 東京ノ花色ナリ 紫ハ青ミタル紫ナリ 蒲萄

ノコトモ今ハ ムラサキトモ ムラサキトモ ムラサキトモ

濃紫ハ色濃シ 色ハ二位ノ人ノ袍ノ色ニ 紫草ハ色ヲ染ルニ 紫草ヲ ヲエビテ ヲエビテ ヲエビテ

ウツ 紫草ハ也 二位三位ノ人ハ紫ノ袍ノ色ヲ 二位以下ノ人ハ

紫ト云モ 紫ト云モ 紫ト云モ 紫ト云モ

ハ故ル 紫草ハ色ヲ 紫草ハ色ヲ 紫草ハ色ヲ

ヒ

朱華

日本紀廿九天武天皇十四年制初定明位已下進位已上之朝服色

位已上、並靴朱華云々

松の落葉

そもそもハ万葉集の哥にそ初めて色の赤裳のそがゝといひもじる朱華とらけきバ初めて色ありハ千矛神の御歌に衣の初めて色ありとあるおもられひとれバ此ことさだめいましへのこゝろよてこゝのありなる歌初めてきれくる次の御世まハかりのにあらひとまひてあらき歌紫の次としたまへり

按赤色数品あり朱華、深桃芳、中桃芳、浅桃芳、深緋、浅緋、韓紅、中紅、退紅、纁、赤白橡、紅梅、苛れ芯しき事ハ各條に就て見るべし この内韓紅ハ深紅あり中紅ハ火色あり退紅ハ浅紅あり紅梅ハ裝束抄の類に見ゆ此も浅紅あり又衣下襲等の色ハ表紅裏紫或紅梅と称するなどある類ハ後世の事なれ同名異義あり混ぜべからず

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

蘇芳

嵯峨天皇

日本後紀、弘仁六年十二月壬戌勅 親王内親王女御及三位以上嬪妻子
竝聽着蘇芳色象子刀子

延喜殯正式 凡蘇芳色者親王以下参議以上非参議三位及嬪
妻女子羔孫王並聽着用

深蘇芳

延喜縫殿式雜條用 深蘇芳綾一疋 蘇芳大一斤 酢八合 灰三斗
薪一百九斤 帛一疋 蘇芳大十兩 酢七合 灰二斗 薪六十斤 纈帛
一疋 蘇芳大十兩 酢七合 灰二斗 薪六十斤 纈帛
兩酢二合 灰大斗 薪六斤

中蘇芳

同 中蘇芳綾一疋 蘇芳大八兩 酢大合 灰二斗 薪九十斤 帛一
疋 蘇芳大六兩 酢三合 灰一斗五升 薪四十斤 絲一絇 蘇芳大三
兩酢一合 灰五升 薪九斤

浅蘇芳

同 浅蘇芳綾一疋 蘇芳小五兩 酢一合 灰八升 薪六十斤 帛一

緋

日本紀 廿四 特 純天皇 年制 直八級緋

深緋

日本紀廿五 孝德天皇 年制 大小錦冠服色用真緋
續日本紀二 文武天皇 年制 直冠上四階深緋

衣服令 諸臣四位 朝服 朝服 深緋

延喜縫殿式 雜條用 深緋綾一疋 茜大四十斤 紫草卅斤 米五
外灰三石 薪八百四十斤 綿紬絲紬 東絁亦同

小右記 正暦三年九月朔日 明順真人叙四位 乞袍以三位袍
送四呂 如何然而遣之 其褒云 延代三四位袍 其色一同 又最
初着用如此 云々

西三条装束抄 深紫一位ノ袍ノ色ナリ 云々 浅緋初位ノ着
スル色ナリ 云々 皆如是 呂々アル事ナレ 中古以来四位
已上ノ袍ヲシカネテソムル故ニ其差別ミエザル也 仍
四位ヨリ一位迄オシナベテ黒ク今モ五位緋大位緑也 此
外ノ品ナクナレリ 零落ノ儀也 但四位ニ黒クスル八深緋

○帛一疋 茜大九五斤 紫草九三斤 米四升 灰三石 薪六百斤
貫布一端 茜大十六斤 紫草十四斤 米三升 灰一石五斗
薪三百六十斤 葛布一端 茜大七斤 米八合 灰四斗 薪九十
斤 紫草七斤

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

五位色者櫨芳染有老若差可准深緋字可尋矣五位外記文辨正尉是射事袍赤号朱鉸載是可謂浅緋字

ヲ深ルニ紫草三斤ヲ加ル故ヤサレモ四位ト三位トノ色ハカハルベキ事也参議正四位下天明天暦五年二月中納言ニ任テ従三位ニ叙スル時九條右丞相ヨリ浅紫ノ袍ヲヌギテツカハス又資房記ニモ三位ニ叙レテ袍ヲ改ル ヨシ見エ侍ルモノ也

蛙抄 緋以深為四位色以浅為五位色但四位色者椹金染不異于今世三位以上所用之黒袍ネフシカメ

四季草 深緋といふい緋の色甚深くして黒くありとる浅いふ色とへば桑の實の初い赤きが後黒くありとるが如し

浅緋

續日本紀二 文武天皇大宝元年制 直冠、下四階浅緋

衣服令 諸色五位礼服朝服 浅緋

延喜縫殿式 雑染用 浅緋、綾一疋、絁大廿斤米五斗庸二石薪三百六十斤。

續世継 白河天皇の御子孫を記し給ふ 或人の申されるハ椽の衣い王の四位の色まて只人の四位と王の五位とハ黒ハけ浅青只人の五位ハ白けのきぬまてうはそしくあるべきを今のひと心おもそまく四位い王のきぬまあり五位ハ四位のきぬ浅青る歟べし 検非違使の上官などいうはそしくなるハけ浅白らとめけるべし

飾抄 五位有櫨芳染六位緑延喜式佐大夫外記史大夫射手青赤色近代四位五位無差別不知故実云云

裝束雑事抄 五位袍櫨芳染綾忘ばら四位に同し家々不同裏平絹色に同し又黒裏も付るあり夏ハ薄物色同

唯心院裝束抄 袍色五位櫨芳染

○帛一疋 長大九五尺米四斗庸二石薪三百六十斤 菅布一端 長六十尺米一斗庸四斗薪九十斤

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4　ガラス使用

元和令 五位緋地下赤衣

四李草 浅緋ハ常の緋の色あり俗に火といふ色あり

西宮記 臨時内宴条 天皇御服赤白橡 縫腋 代闕腋 トミユ

同絹袍 赤色主上及一上卿内宴時服之

源氏物語 乙女 御門ハ赤色の御そとてありれてをきとまへるおいりさまふれり赤色をきとまへる

増鏡 文永三年ヨリ ありぬ、知月に蓮花王院供養ま御幸 ありー院ハ後嵯峨院 ゐら色のうへの御そ新院ハ後深草青色の御袍奉れり女院大宮の御車に平准后もまいりとまふ

延喜縫殿式 雑染用 赤白橡綾一疋、黄櫨大九十竹灰三石茜 絹紬絲紬 東絶赤同 大七竹薪七百廿竹。

各目抄 赤色経紫緯赤

太上天皇着御例

餝抄上 赤色太上皇着御之保元四朝覲着御赤色御袍長寛元朝覲今年不着御赤色着御掾云々今案先院脱屣之始神社御幸朝覲等着御赤色後々着御掾也文案中竹桐也

胡曹抄 太上天皇赤色御袍尋常着之 仍あり

西宮記 天皇礼服赤袍 月の物赤袍 ゆるしの御

天皇御位系御袍 高円七 早しれ花形 書同 絵

あるれ あるる孤トなるストアレハ

西宮記 天皇礼服赤袍 月の物赤袍 ゆるしの御

天皇御位系御袍 高円七 早しれ花形 書同 絵

あるれ あるる孤トなるストアレハ

○弔一疋黄櫨大七十竹茜大五竹灰三石薪大百竹絲一絇黄櫨大五竹灰一斗三升茜大五両薪卅竹 資布一端黄櫨大十五竹灰三斗五升茜大一丁八絇薪一百九竹 又物見

七

皇太子着御例

胡曹抄 赤色闕腋袍 童時 六花形九内有唐鳥裏疑冬打云々

同 赤色綾腋袍 太子元服之後云々

親王着御例

胡曹抄 赤色織物闕腋袍 童時 厄長小癸文打裏

臣下着例

延喜聲正式 乙赤白橡袍 聽参議已上着用云々

西宮抄 赤色 壬上冬一上御内宴時服之云々

桃花薬葉 保元三内宴白関白法性寺赤色袍 脇帯云々

後鳥羽院関白裝束抄 赤色袍事着此袍之時可為袴下重寛

治表袴同被袴之異見代々之記代々令着者例御堂寛弘二

年三月八日中宮大原野行啓 御年四 寛仁二年十月廿二日

御年五十二 上東門院行幸東三条行幸時法興院殿又如此云々

京極大殿義昏三年十一月廿七日大原野行啓御年卅八

寛治二年正月十九日行幸御年四十七 袍織物 知足院殿

天仁二年乙月六日高陽院競馬行幸 御年三十二 袍織物 月輪

建久五年三月十六日中宮大原野行啓 御年三十 袍唐綾 岡屋

殿建長二年十月朝覲行幸彼時岡屋御記曰文之通雲如常

裏蘇芳用赤色袍之時先例多用織物雖然綾又有例其色頗

赤非紫色 建長二門御記曰赤色袍不限靴柄臣第一上御

可着之由見西宮記又今度袍用綾夏保元年給内之時法

性寺殿雖若大條殿雖若齢令用之給況於表袴哉表袴如此

之時可用綾文雖然表老之間用綾且又非無例保元法性寺

殿如此准彼例可着用也

国立国会図書館 タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

皇太子着御例

胡曹抄 赤色闕腋袍 臺時体 六花形九内有唐鳥裏疑冬打云々

同 赤色綾腋袍 太子元服之後云々

親王着御例

胡曹抄 赤色織物闕腋 臣下着 長小葵文 打裏臺時云々

延喜聖 白橡袍 聽参議已上着用云々

西宮抄 紅色 壬上冬一上御内宴時服之云々

桃花薬葉 保元三内宴白袴闕白法性寺赤色袍馬脇帯云々

後鳥羽院関白裝束抄 赤色袍事着此袍之時可為條下重寛治表袴同被條之異見代々之記代々令着者例御堂寛弘二年三月八日中宮大原野行啓御年四寛仁二年十月廿二日御年五上東門院行幸東三条行幸時法興院殿又如此云々

京極大殿義昏三年十一月廿七日大原野行啓御年卅八

寛治二年正月十九日行幸御年四十七袍織物 知足院殿

天仁二年乙月六日高陽院競馬行幸御年三十二袍織物 月輪

建久五年三月十六日中宮大原野行啓三十袍唐綾 岡屋

殿建長二年十月朝覲行幸彼時岡屋御記曰文之通雲如常

裏蘇芳用赤色袍之時先例多用織物雖然綾又有例其色頗

赤非紫色 建長二門御記曰赤色袍不限靴柄臣第一上卿

可着之由見西宮記又今度袍用綾度保元年治承内之時法

性寺殿雖若大條殿雖若齡令用之給況於表袴哉表袴如此

之時可用綾文雖然表老之間用綾且又非無例保元法性寺

殿如此准彼此例所着用也

国立国会図書館 タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

淺紅

日本記畧 一 醍醐天皇延喜十四年六月一日丙寅

禁制美服紅花深淺色等

延喜彈正式 女婢色服条

淺紅

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4　ガラス使用

淺紅

日本記略一 醍醐天皇延喜十四年六月一日丙寅

禁制美服紅花深淺色等

凡公私奴婢服云々淺紅云々

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

貞觀儀式 春日 退紅染衫
新撰字鏡 退紅 先曾女

退紅

延喜釋正式 車馬ヲ従 服色条 退紅

延喜縫殿式 雜染用 退紅帛一疋紅花小八兩酢一合稾半圍薪卅斤

薪卅斤細布一端紅花大四兩酢二合稾半圍薪卅斤調布一

端紅花大十四兩酢一合大匁稾半圍薪卅斤

衣色目愚考 荷田在滿 退紅ハ唐ノ染色ニテ褪紅トイフモ同ジ

〃 淺紅ヲ云由正字通ニ見エタリ本朝退紅ヲアラヅメト

訓ズルハ兼々ニ染ルノ義ナルベシ欽定四庫全書次第ニハ荒染

ト書タリ西宮記ニ洗染ト書ルハ借訓ナルベシ万葉集ニ

桃花褐ト書テ古来アラ染ト訓ジタリ其歌ニ桃花褐浅等

乃衣浅兩トアリ此等並ニ浅紅ノ謹トスベシ然ルニ當世

ノ退紅ハ淺紅トハ見エズ是染式ノ過マレルナルベシ

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

赤練

延喜弾正式 奴婢服色条 赤練

同 東宮従 服色 赤練

延喜弾正式 諸王禄大色 其服色者用練

練

続日本紀廿八 称徳天皇 神護景雲元年 四月辛巳 始授諸王四世者正六位上五世者従六位下其朝服用練色

義解 練者三条絲也

集解 釈云浅絲也俗云薄比

続日本紀考証九 石原氏曰練剖ソヒ緋色浅者也令義解云練三条絲也即是案衣服令九服色白黄丹云々如此之為當色以下各得服之優比大位不得服練今優王氏特聽服之也

按 或説に練い薄赤き物なるべし鳩い大方い青き鳥あまど腰い薄赤き物なりといへり

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4　ガラス使用

紅梅

東文雜記 紅梅ハ色ニ出テ花ニ出ル者ト梅ト共ニ出ル者トアリ花ノ色ハ淡キ色ヲ以テ紅梅ト云ヒ紅梅花ノ色ハ猶ホ濃キ色ヲ以テ紅梅ト云ヒ赤ハ桃色ノ如ク繁文ヲ以テ云フ

（昭和）

（昭和）

白襖

東文雜記 白襖ト云色ノ事 雨曹抄ニ白襖ハ色ト云リ外ニ外ニ襖ノ名ヲ有ル色ハ白ノ色ニ有ル者ト云フ

襖ハ皆ノ名ノ如ク用ヒ来ル也 襖ハ表裏共ニ表ノ色ノ如ク此ニ起レリ 古ハ文ノ字ノ如ク襖ノ字ノ如ク襖ノ字ヲモ云フ也

野宮故中納言定基ノ說ニ氣陵ト天皇ノ御料トハ別ニ氣陵ヲ分ツベシ然ルニ氣陵ヲ氣陵ト各同スベキガ為ニ氣陵ノ字ヲ用ヒルニヤ只氣陵ト云テ心ニ文儀ヲ各同ニスキテ文字ヲ書ル事例アリ畢竟山陵ニ氣陵ト云ルハ古キ俗ノ各同ナルベシ

御細線細
東絶布同

東文雜記 ニ下 麹塵ト云色ハ鼠黄ノ黄ガ少ク見ル色ガ俗ニ云フ きちん色といふ

麹塵

西宮記 紅月 五月大日競馬幸武德殿天皇服青色天暦九年移穩塵之間改赤色云々

禁秘抄中御事 裏束 青色黄櫨臨時祭庭燎行事場始等被用之

又朝覲行幸後出御或時被用之云々

雲圖抄 石清水臨時御禊儀主上御束帯御位袍庭座儀御禊了後敷座中座重出御改着御麹塵袍云々

延喜縫殿式 雜條用 青白橡綾一疋苅安大九十斤紫草大斤灰三石薪八百四十斤帛一疋苅安草大七十二斤紫草四斤灰二石薪六百六十斤絲一絇苅安草大二斤紫草一斤灰七外薪九斤貲布一端苅安草大四十八斤紫草五斤灰一石一斗薪六十斤

太上皇着御例

山槐記 治承四年二月五日丁亥陰晴不定讓位後日新帝朝覲舊主之日舊主不着黄櫨染着御青色袍云々

十五

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

扶桑略記曰 延長六年十二月五日行幸于大原野鷹狩遊遨云々親王公卿及侍臣大佐以上着麹塵袍云々

皇太子及親王公卿侍臣着麹塵袍例

扶桑略記廿三 寛平八年丙辰壬正月六日有子宴行幸北野雲林院其色從者皇太子及一品式部卿本康親王上野大守四品貞純親王四品貞數親王大納言正三位源朝臣能有中納言從三位藤原時平中納言源光中納言菅原道真參議從三位源貞恒參議源希殿上大位以上皆着麹塵袍云々

西宮記 臨時八月内宴条 皇太子王卿以下同服麹塵闕腋袍着奥袋靴等云々

同 應和二年三月廿日有殿上賭弓支前方麹塵袍下重馬脳帯後方同袍躑躅下重班拏帯云々

同 史部記曰内宴日中務王公侍臣着青白橡鉄胞奥袋餝劔等但非三木不服綾袍侍臣武官者帯劔文人服同縫腋云々

江家次第 皇帝服 元 祿給親王御下重表袴太政大臣青色御表衣御下重衣袴云々

續世紀 鳥羽の御賀 仁平二年三月七日鳥羽院ゆゑいきをさせたおひて法皇の五十の賀せさせたまひしに人はちるきまもりのはらさ雲の上人あ紅色のさきなくゆ柳ゆくゆの下重手やれくひの水精の苦日のもかゝやきあへりと云々

截人及雑色着例

雲圖抄 御系會内論義篇 朱云行幸截人必着青色云々

同 仁王會篇 行事截人着青色云々

山槐記 永暦元年十二月十五日今日八十島奥侍勅使截人右衛門尉平時盛延鶴尉衣冠青色袍

江家次第 賀茂祭日覧前駆同禊日若青色不具之前駆者先参入付截人奏此由有仰召截人青色給之

侍中群要 麹塵袍除節會兎主上着御日之外可然掲焉所必着之着蘇芳下襲時付蘇芳裏柳色下重時付青色裏蒲萄付紫裏云々

飾抄上 青色截人着之所雑色御禊前駆着之并領中由放截人被聽禁色之時先着御衣等其意也

胡曹抄 皇太子青色袍柄葉下襲不帯劔笏

胡曹抄 太上天皇麹塵御袍隨侯服之

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

裝束雜事抄 青色袍、練絹綾物文甚丹毛長鳥ちて青ぬき黄裏薄芳

壷袍とは云なり此青色ハ殿上大位藏人一鶴必着之時ハ三人まで着して路次供奉殿上まて参内を堂上ハ一人ならてハ着をとゝ云々

源氏着例

夷部王記 天慶四八廿四源為明加元服源氏暫在孫在服麹壷袍結髻或抄云麹壷青色事也云々

四季草 深緑と云ハ藍本色の深きをすて俗に緑ふかしとゝ本紫とゝもいふ色なり

○緑

日本紀廿五孝徳天皇大化三年制 大小黒冠服色並用緑

深緑又云柚葉色

同廿九天武天皇十四年制 勤位深緑

同卅四持統天皇年制 勤八級深緑

續日本紀二文武天皇大宝元年制 勤冠四階深緑

衣服令 諸臣朝服大位深緑

令集解 大同元年十月七日制 五位七位者同着深緑初位者同服深緑

延喜弾正式 凡六位七位朝服同着深緑八位初位共服深緑

延喜縫殿式 雑染用緑 深緑綾一疋藍十圍苅安草大二斤灰一斗薪一斗薪二百四十斤帛一疋藍十圍苅安草大九両薪六十斤百廿斤絲一絇藍三圍苅安草大九両薪六十斤

元和令 六位深緑

裝束雜事抄 六位袍緑衫平絹を糊に染とる物あり裏模芳夏無文薄物とめと云物なり色二藍むらさき色あり

唯心院裝束抄 六位袍緑平絹夏八薄物青六位緑穀織ナリ

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

御當代裝束抄大紙帳束 袍夏冬有夏穀二藍冬平絹花色

蛙抄 綠以深為大位色以淺為七位色但今世雖大七位無淺深色次並着綠色而已白恨格式之文平然而今世有夏冬之差冬着綠紗裏蓑夏着薄物二藍無文也

中綠

延喜縫殿式雜袍用 中綠綾一疋綿絁糸細糸同藍大圍黄蘗大二斤靳九十竹帛一疋藍五圍黄蘗大一斤八兩靳卅竹絲一絇藍一圍黄蘗大九兩靳卅竹

○繧帛一疋藍半圍黄蘗大二斤絲三絇藍小半圍黄蘗大二斤

青綠

延喜縫殿式雜袍用 青綠帛一疋藍四圍黄蘗二斤靳四十竹青綠絲一絇綠木藍八分圍黄蘗八兩

中緑

延喜縫殿式雑染用 中緑綾一疋 東綿紬糸同細 藍大圍黄蘗大二斤
靳九十斤帛一疋藍五圍黄蘗大一斤八両靳卅斤絲一絇藍一
圍黄蘗大九両靳卅斤

緑帛一疋藍半圍黄蘗大二斤絲三絇藍小半圍黄蘗大二斤

青緑

延喜縫殿式雑染用 青緑帛二疋藍四圍黄蘗二斤靳四十斤 青浅緑絲一絇黄浅緑本 藍小半圍黄蘗八両

浅緑

日本紀廿九天武四年制 務位浅緑

同卅 持統四年制 務八級浅緑

續日本紀二 文武天皇大宝元年制 務冠四階浅緑

衣服令 諸臣位朝服 浅緑

延喜縫殿式雑染用 浅緑綾一疋藍半圍黄蘗二斤八両帛一疋藍半圍黄蘗大二斤。

元和令 七位浅緑

唯心院装束抄 七位浅緑縹之事平絹穀織也

四季草 浅緑は常の萠木色なり

按緑は六位七位の富色なるを諸家の装束抄を見るに紺とも緑とも二藍とも云りて甚盛なり冠服考に六位は深緑おと制をこえば但保安四年外記々に供奉外記史内記等各着深緑縫腋袍柚葉色まと御禊行幸服飾部類曰寛治記曰外記二人各着深緑袍俗称柚葉色トまと天仁元年大記曰判官中務丞藤原安頼柚葉色闕腋と云る柚葉色は緑の濃くて深あるなどはやはらむ然れども事と云るをりは當色よりも貴き袍を許されて着る事もあり續紀の天平宝字六年は正六位上多治比小耳が送高麗人使となりしと云れば本色を失ひとるは後世の事なるべくれど其源因は源氏物語みなぬくのきぬこそうすきらぢなれど大位の中なる蔵人は青色なるくみえく云々枕草子めでたきもの紅梅の六位の蔵人こそなめでたけれいみじき君達なれどもえしもきとおえぬ云々やはりものの哀心ゐまらをくさるる所をいろもぶ法ちどいとめでたきあり云々とある青色は麹塵のことなれて深緑よりは黄色多くことゐ綾地なれば青色の著くええさるさまなれるが緑を青色といへるより五色の青色とあやおりく染るは黄を交へざるより終に紺緑に藍等の色にありしれるべしとれ位色を盛色といふものなるまじき事なり

○紐

日本紀廿五孝德天皇大化三年紐大小青冠服色並用紐

論語集註紐深青揚赤色吳氏程曰揚赤色俗謂之帶艶色

○縹、深縹

日本紀卅四持統天皇追八級深縹

續日本紀二文武天皇大宝元年制追冠四階深縹

衣服令諸位朝服深縹

延喜縫殿式雜染用深縹綾一疋藍十圍靭六十行帛一疋藍十圍靭一百九行○

四季草深縹と云い縹色の深きを濃茶色あり

元和令八位深縹

蛙抄縹以深為八位色以淺為初位色今世此色不見

中縹

延喜縫殿式雜染用中縹綾一疋藍七圍九十行帛一疋藍五圍靭六十行絲一絇藍二圍靭卅行

次縹

同次縹帛一疋藍四圍靭六十行絲一絇藍一圍大半靭九行

○縹一絇藍四圍靭四十行貫布一端乾藍二斗灰一斗靭卅行

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

淺縹

日本紀卅四特統天皇 進八級淺縹

續日本紀二文武天皇 進五位四階淺縹

衣服令諸王朝服初位 淺縹

延喜縫殿式雜染用 淺縹綾一疋藍一圍薪卅束竹帛一疋藍半

圍薪卅束竹綿一絇藍大半圍薪卅束竹

四季草木文色 淺縹の常の縹色すて俗あいふ花色あり

元和令 初位淺縹

○黄橡

僧尼令 義解木蘭黄橡也

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4

ガラス使用

延喜式部式 凡勅任朝參者服文官服到當位及參議若無文位者黄袍

深黄

延喜縫殿式 雜織帛 深黄綾疋 綿絁絲絁

東絶亦同 苅安草大五斤 及二斗五升 靳大十斤 帛一疋 苅安草大二斤 及八升 靳廿斤 絲一絇 苅安草大一斤 及三斗 靳廿七斤

浅黄

同 浅黄綾一疋 綿絁絲絁 東絶亦同 苅安草大三斤八兩 及二斗 靳廿斤 帛一疋 苅安草大二斤 絲一絇 苅安草大十二兩 及二斗 靳廿七斤

延喜公事服式 尋常通得著草鞋 家人奴婢 楊墨衣

西宮記 略時 黄衣 八 無品親王孫王 綾 源氏及良家子孫 弱冠 着着之公卿子孫 候殿上 無官時 用黄衣

貞觀儀式一 紋綾 山城国歩兵左右各十人 着皂絁袴 黄衣 白布帶 靴 巾 杖

同 同 輿長各六人 頭 在網外 輿丁 次列 陳 以三人分 黄衣 白布帶

新勅撰集 神垣にくちなしぞめの衣きて紅葉にまがふ人やそふりて

續世継 八白河天皇の御子孫 条 うへの御その色なども尋得侍らぬをりくも侍とらや位ばかりしまさぬ程い浅黄と日記に侍るなるをいあをき色ときれるら猶ばかつられくて花園の御ほうねどのに尋ね奉られけるもをされくてばえ

延喜雜正式　紫綾服　黃

延喜式部式　凡勅任朝參者服文位服到當位次第若無文位者黃袍

延喜縫殿式　雜位帝　深黃綾一疋　綿絁　絲絁　東絶布同　茹安草大五斤　夾二斤五分　靴大十斤　帛一疋　茹安草大二斤　夾八分　靴北斤　絲一絇　茹安草大二斤　夾三斗　靴九斤

淺黃

同　淺黃綾一疋　綿絁　絲絁　東絶布同　茹安草大三斤八兩　夾二斗　靴北斤　帛一疋　茹安草大二斤　絲一絇　茹安草大十二兩　夾二斗　靴九斤

○黃

日本紀卅　持統天皇七年正月詔　令天下百姓服黃色衣（キソメノキヌ）奴皂衣（ハクキヌ）

續日本紀五十　和銅五年十二月制　無位朝服自今以後着襕黃衣襕廣一尺二寸已下

衣服令　制服　无位皆皂縵頸巾黃袍云々烏油腰帶白襪皮履朝

延喜公事　即服之尋常通得着草鞋家人奴婢椽墨衣

西宮記　略時服　無品親王孫王綾源氏及良家子孫弱冠者着之

公卿子孫候殿上無官時用黃衣

貞觀儀式　一紫綾　山城国安兵左右各十人着皂綾黃衣白布帶靴脛巾靴杖

同　同　輿長各六人　雜色綱外輿丁數列陳以三人分　着黃衣白布帶

新勅撰集　神垣しくちなしぞめの衣きて紅葉にまがる人やそふりこ

續世紀八　白河天皇の御子孫なるはらくの御子条　うへの御その色なども尋得侍らぬをりくも侍とりやゐ位ばかりしまさぬ程は淺黃と日記に侍るなるをいあをき色ゝきれるゝ猶ばかつゝれくて花園の紀ほねどのゝ尋ね奉られけるもをされくてばかえ

給をぬよし申給ふなどきこえし一宮の御元服のハ黄なる
をたてまつれりとあるべし位まことえさを給をぬハ黄丸
る衣なぞ誠なもおはしおそらく無位の人ハ黄袍れるべし
きハ小野の篁が隠岐より帰りて作りとる詩なもこふ君業
をあいをハ我をみるべし白きことをそろうへなあり黄なる
支を衣なありなどぞきこえ侍し神の社の黄狩衣なども位
なきうへのきぬの心なるべし

飾抄上 浅黄親王着御保延五或祕記曰雅仁親王元服諸卿等
相談曰無品親王着黄衣或曰謂之浅黄専不分明宗能卿曰是
黄色之薄也予曰或記曰親王着黄衣注曰其浅黄也世謂之黄
衣或記曰着緑袍云云以之推之猶浅黄色旅体也宗能曰浅黄
者是心喪色也豈可用哉余人更不口入予心中雖存無其謂之
由更不出口外帰亭後勘日記長和二年三月廿三日行成記曰新
冠両王着黄色其之浅黄袍也寛治元大二御暦曰着緑表衣給云
云攺着男御装束緑御袍浅黄也世称之黄衣面菱綾練之裏同
色平絹同練張之有文御帯仆御装束自此前自待賢門院被調

進也久安大十廿三新大納言傳法皇詔曰鳥羽親王元服夜袍
色如何其意趣宜裁奏聞者報状曰無品親王黄衣之由見西
宮記臨時中又縫殿式有呼見浅黄由也薄可用薄黄色

胡曹抄 親王浅黄袍黄絲緑綾菱小綾浅黄綾謂之黄衣

同 元服以後束帯浅黄綾袍文雲鶴無裏紅張大口同色打袖同
色単衣云々建暦小葵同色裏聊有黒氣黄色又不濃建暦二年或
記云袍文或雲鶴之由見記録等小葵之由多有呼見今度乾保
延宇治左府記如此被定仆乞又或無裏云々今度乾彼記又被
用裏也云々

令御抄 愚按衣服令云無位黄袍西宮記謂無品黄衣也又延喜
縫殿寮式曰無位黄也故無品親王衣用黄衣此謂親王着紫
以下着一品親王用紫以下也同者色無品親王黄衣而言也但
縫殿寮浅黄有緑色也於曰無品親王或用緑袍故長和二年
三月廿三日行成卿記云新冠両親王着黄衣注曰其浅黄之黄言
云々

玉勝間大浅黄と いふ色 浅黄といふ今の世まい青色の薄きをいへ

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

とも昔い黄色のうすきをいひ又綠色をもいへりき此事
吉部秘訓抄建久二年十二月又玉葉建暦二年十二月新王
元服の時の袍の色は淺きてくさぐ論あり黄色の薄きを
いへるが本也綠色をいふい淺葱の意にて異れるを唱へ
の同じきおゝに混ひはるあり又後に薄青色をいふい綠
色よりうつきるなるべし

○摺

古事記下 其臣服着紅紐青摺衣云々
同下 雄略天皇巻 一時天皇登幸葛城山之時百官人等悉給着紅紐
之青摺衣服
同同 赤猪子仕奉悉還其竹服之丹摺袖云々
日本紀廿九 朱鳥元年 綦摺御衣三具錦袴二具
下 續日本紀十五 天平十五年 御石原宮樓賜饗於百官及有位人
等有勅鼓琴任其彈歌五位已上賜摺衣大位已下祿各有差
上 同 續日本紀十三 天平勝宝二年 天皇御南苑宴侍臣饗百官及徽海客於朝
堂五位已下上賜摺衣
同三十 岩亀元年 供奉歌垣其服並着青摺細布衣年紅長紐云
々
類聚国史廿二 延暦十一月 遊獵于交野右大臣從二位藤原朝臣
継縄献摺衣給五位已上及命婦采女等
同百九十三 延暦十八年 御大極殿宴群臣并徽海客奏楽賜蕃
客以上綦摺衣云々

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

臭觀儀式 殘略文書 榛監摺綿袍
同同
藍地青草摺綿袍
紺青摺單衣
緑地青草摺綿袍
青摺綱布衣
榛監摺綿袍
青摺布衫
細布摺袍
黄地黒摺布衫

万葉集七月草雨衣曽保施君之為緑色衣将摺跡念而
同不時班衣服欲香衣服針駅時ニ不有鞆
同十恩子之衣将摺雨々保地與鳴之榛原秋不之友
同九紅赤裳数十引山藍用摺衣服而 云々
弘仁内裡式 新會式 一月新 今日小角不論高下皆着青摺袍
臭觀儀式 三殘略儀 大嘗 次賜小角親王已下及群官并内侍已下
女孺已上青摺衫各一領 紐自餘結紐自餘結紐繁男女殘保相副紅保倉及寮曰皆如曰蔵鬘
延喜大嘗祭式 小角親王以下皆青摺袍五位以上紅垂紐殘保相副
自餘皆結紐内親王及命婦以下女孺以上亦殘自餘結紐以親王以上皆紅紐以下皆青紐
同縫殿式 新嘗祭小角諸司青摺布衫三百十二領 細布一百廿別二十二丈一尺 領並殘布一丈 紺紐料四丈 黄紐料五十四圍半 横料米二斗四外八分生絲四絇 紅花大十三斤五兩 云々中宮小角人青摺細布衫四十九領 云々 紺紐料 云々
同春宮坊式 騎馬射手帯刀十人著小松摺衣
同近衛式 殘略後 紫摺衫

西宮記 臨時嘗會條 新 天皇服帛御衣小忌王卿以下着當色青摺布袍 花ニ曰影綬 履等云々大忌王卿以下如恒 云々
同 同豊明日条 五節舞姫節會夜羅青摺長袂 云々左右着小紐日蔭綬
同 同臨時条 舞人装束青摺布袍赤紐着右方 俱小忌時着右方 云々
雅亮装束抄下 をみのこゝを、をみ殺きるこゝを、そくたゝのうへふあ花をり花きるあり、そのをりのをくてむ色きじをぬり、
うおこちめ殿上人、五をちのをちゐの日大ぢやうゐ、ちゐどゐ、
蔵人あでできる云々、ゐり又こきもひゝのあきがまひ人のや
うゐゐこがこゝゐのゐりふゐもとぢぬくるあり、こきてもゐくひ
もゐり、こまこゐ右のゐかこのうへゐ中をとぢつくく、うゐるま
へゐもとぢくく、うゐろいゐきるもとぢくるがよきあり、云々
餝抄下 諸司小忌身ニ懸油右右各一懸 左四懸也以紙捻閉之
云々大嘗會若豊明節會小忌袍着次第只如闕腋以袍着小忌
許也 雖非衛府至小忌闕腋也

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

同下 赤紐、濃打ハ薄芳打也細帽帽也小忌ハ着右有舞人着レ之依祖湯也

古事記傳卅六ニ 古ハ凡て褶衣を好美き物ゐして男女共に時と礼く服とることゝ万葉の哥ゐ数あらずよみとる趣此ぞを以て知るべし云々後ゐ至ても褶狩衣などゝ見えたり神事ゐハ古の隨を傳ふて後ゐで大嘗新嘗及賀茂臨時祭などゐハ定まりて褶衣或用ひらる靜褶といふ山藍を以て摺きるを云也也上代ゐハ山藍ゐ限らず何ゐまれ青色ゐ染きるを云しゐ其ハ詳ならず

錦所談 貞觀延喜ノ間青褶ノ制今ト異ナリ垂紐ト云ハ今モ青褶ノ有ニ結垂タルナルベシ結紐ハ諸司ノ小奇ノ如ク組ヲ有ニ付タルナルベシ中古ノ小奇ハ今ノ石褶ノ如ク形木ニアテヽスリ青褶ハ紙形ニテスリ或ハ畫ク樣ニ見エタリ

羽倉考ニ考山藍 或ノ曰山藍トハ常ノ藍ナレ也故ニ殖タル物ニ非ザル山野自然生ノ物ヲ云ナルベシ凡菜及草ノ類ノ元ヨリ一物アル名ニ山ノ字野ノ字ヲ冠ラシムルハ多分自然生ナリ土ノ字馬ノ字ヲ加ヘテ冠シメ称スルガ如シ其殖作ル藍ハ不埒ナレバ神事ニ之ヲ用ユル事ヲ忌ケ山野自然生ノ藍ヲ用ユルナルベシ試ニ一日自然生ノ藍葉ヲ採テ布ヲ摺ニ青ノシテ美ハシク実ニ小忌ノ袍タルベキ物ナリ柳本草ニ藍ノ種類尤多シ本朝專ニ藍ト称スルハ蓼藍ナリ山藍モ亦山野ノ蓼藍ヲ採ベシト在滿案スルニ山藍ノ物タル詳ナラザルニ依テ頻ニ問ヲ施スト雖若干人ノ答フル所皆明ナラズシテ古書ノ文ト合ハズ唯此説心服スルニ堪タリ其證三ツアリ本草ノ類ヲ考フルニ山慈姑、山龍膽、山茶、山蔬、野菊、野雞冠、野山藥、野天門冬等皆自然生ナリ土茯苓、土薑皐、馬藺、馬蓼等ハ皆皐シメタル名ト見エタリ山ノ字ノ中ニモタマノヽニハ山葵ナド云殖物モアレドモ此類ハ至テ希ニシテ先ハ田園宅地等ニ殖

メルニ非ザルノ称ナリ是一ツ又本草以下ニ藍種類尤多ケレ𪜈山藍トヱ物見エズ是山藍ハ蓼藍ノ中ニ在テ別ニ一種アルニ非ザルガ故ナリ是ニツ又先ニ源氏物語ヲ考フルニ若菜ノ巻ニ山藍ニスレル竹ノ節ト有ルヲ細流ニ舞人ノ着スル小忌ヲ云リ藍ニテ摺レルナリト解ヱタリ在満恩ヘラク延喜縫殿寮式ニ新嘗會小斉諸司青摺布衫三百十二領料山藍五十四圍半中宮小斉人青摺細布衫四十九領料山藍十五圍ナドヽ有テ同式雑條用度ニ條絲綾一匹藍十圍中絲綾一匹藍六圍ナドヽアリ又明月記建暦二年十一月十日賀茂保孝尋送山藍ト見エタリ細流ノ如ク山藍則常ノ藍ナラバ式ニ此ノ如ク藍ト山藍ト書分ツベキニ非ズ又世ニ多キ物ナレバ何ゾ尋遥送ルニ及ブベキ彼源語ノ抄ノ如キハ詞花言葉ヲ解スルニ切ニ見エ将財草木寄ヲ辨スルニハ疎ナラヱ細流ノ説信スヘカラズト之ヲ捨来ルガ然ルニ今此自然生ノ説ニ據レバ式ニ書キ別テルモ然ルベク細流ニ一物トセルモ可ナリ其殖メル藍ハ多ケレ𪜈自然生ハ尋ネズバ有ベカラズ然レバ明月記ニ尋遥ルト云者モ其義明ナリ式、明、細、ノ三書此説ニ碍ハルル所ナシ是三ツ山藍ハ是山野自然生ノ藍ナリト注セル明文ハ無ト雖此三証ノ暗カラズ彼三書ノ相乖カサル味フ時ハ山藍殆知ベシ但鈴抄ニ山藍ナキ時ハ麦ノ葉目波ヘ志キ木ヲ用ヱル由見エタリ殖ル所ノ藍ハ不浄ナリ若ハ此故ニ山藍ヲ用ヱルトナラバ麦ノ葉モ亦不浄ナリ難ヲ蒙フル事アラン然レ𪜈麦ノ葉ヲ用ヱルハ後世ノ事ニシテ古書ニ見エズ古ハ文華隆盛ニシテ各正シク義明ナレバ元ヨリ浄キヲ撰ビテ山藍ヲ用ヰタルナルベシ中古以来ニ至リテハ殖テ義ニ拘ラズ唯例ヲ守ルノミニテ假令バ紫ノ袍ヲ黒ニ染替テ貴キ朱衣ノ上ニ穿シキ黒衣ヲ次ヅル類アレバ此山藍モ浄キニ依テ用来ルト云ノ義ヲ辨ヘ知ニハ及ブベカラズ唯用来ルニ任セテ之ヲ用ヱル故ニ山藍ナキ時ハ浄不浄ノ差別ナク摺テ色ノ似タル葉ヲ用ヱルナルベシ其山藍ナキ時候ニハ常ノ藍ノ葉モ

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

○皂

日本紀廿一 崇峻天皇巻 大連之軍忽然自敗合軍悉被皂衣馳猟黄
頻勾原而散云々

同廿九 推古元年正月記 朕問王卿以無端事仍封言得實必有賜於是
高市皇子被問以實封賜紫摺御衣三具錦袴二具云々伊勢王
本得實即賜皂御衣三具紫袴二具云々

同廿七年正月記 令天下百姓服黄色衣奴皂衣

○橡

賤服の部

衣服令 制服 无位皆皂縵頭巾黄袍烏油腰帯白襪皮履朝廷公
事即服之尋常通得著草鞋家人奴婢橡墨衣

延喜彈正式 凡公私奴婢服黄葡萄色紅赤練橡白橡墨云々

万葉集七 橡衣人者事無跡曰師時従欲服野念

同 橡解衣之恠殊欲服此暮可聞

同十二 橡之袷衣裏而為者云々

同 橡之一重衣裂毛無云々

本有ベカラズ故ニ麦ノ葉ヲ児用ニルト見エタリ

令義解 謂櫟樣本實也以櫟染繒俗云緩櫟衣

貴服の部

延喜縫殿式雜染用 櫟綾一疋、櫟（東絶本同）二斗五升茜大二斤灰七升
薪二百廿斤帛一疋 櫟櫟一斗五升茜大二斤灰五升薪二百廿
斤絲一絇 櫟櫟六升茜大大両灰二升薪卅斤

續世継 白河天皇の御子孫なるべくの御子の絲し 或人の申さきれるハ櫟の
衣ハ王の四位の色なれ只人の四位と王の五位とハ黒あけ或
著只人の五位ハあけのきぬなれ王四位ハ王の衣にあり五位ハ四位の
のひと心おなじなれ
きぬ或著るなるべし 按非遵使の上官などハうちゝくち
ほあるを或あらさあけるべし

飾抄 四位已上櫟

元和令 大臣袍櫟 吳文小直衣親王袍櫟小直衣云々花色四位
以上櫟云々

續日本後紀九 承和七年五月戊戌 天皇除素服著黑絹御冠櫟
條御衣以臨乃也御袴及衛
府屏風之緣並乃墨條細帯

按賤服の櫟ハ義解ニ以櫟染繒とあり貴服の櫟ハ延喜式に
茜色加へて綾染る故に櫟の名ハ一つなれど其色異なれバ
おなるべくも非ず又裁縫も異あり荷田在滿の説ニ延喜式
の服色の制一位反二位の大臣ハ深紫二三位ハ中紫四位ハ
深緋ありしニ一條の院の頃より四位以上其色一同なる由
小右記ニ見ゆ但此時ハ猶紫ニ染とあるべし 此後白橡ニ
て二三位五位子鉄漿にて染又ハ下蘇芳にて染て上蘇枋
の枝又ハ柘榴の皮にて染る由桃花藂葉ニ見えたり終に紫
蘇轉して黒と云ふなれども櫟蘇以て染ざれバ家人奴婢の櫟
と ハ色異なるべし其色紫とハ称し難く而も名あきが故に
薩戒記等に櫟と称するなるべし但櫟ハ卑服凶服の名なる
蘇高位の色の名とせるハ誤なりと云傳ふる事然るべし故
ニ一條禪閤道遥院等ハ都て櫟と称せられとる蘇見ずとい
へり

凶服の部

西宮記 臨時八 帝王雖隨以白易月之制一周間依不臨朝不服佐

泡服黒橡衣神事同看紅色侍臣等依宣旨衣黒橡云々

各日抄　橡蘇芳ノ時殿上四位以上著之

（按）凶服の橡ハ無紋まゝて茜殺いれず藤衣と詠じ来きる服まゝく錫紵の色まゝ類しく浅黒色あるべしといふ説あり猶よく考あべし

白橡

延喜禁正式奴婢服色条　白橡

（按）白橡條式詳あらず西宮記に天皇服白橡御衣とあるハ奴婢の白橡まハ非ず赤白橡青白橡のふたつを通えて

いつる物なり

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

墨

延喜雜正式 奴婢服色条 墨

同 車馬交飾服色条 墨染

○鄰燭

延喜雜正式 車馬飾服色条 鄰燭染

○青褐

延喜雜正式 車馬飾服色条 青褐衣

朽葉

朽葉と云ハ黄色のうるはしき色なり 青朽葉とそ ちやとも云 青朽葉と云ハ薄き黄朽葉と云ハ薄き

胡桃

延喜雜正式 胡桃染

桃

衣服令 衛士桃染衫

延喜大神宮式 桃染衫

負觀儀式 退紅桃花染衣

桑

衣服令

蓁

同

紫

同

支子

深支子

延喜縫殿式雜條用 深支子、綾一疋紅花大十二兩支子一斗酢五合臺半圍薪卅斤帛一疋紅花大八兩支子七外酢四合臺半圍薪卅斤絲一絇紅花小一斤支子三外酢一合五勺臺小半圍薪九斤

黄支子

同 黄支子、綾一疋支子一斗薪卅斤帛一疋支子八外薪九斤絲一絇支子三外薪九斤

淺支子

同 淺支子、綾一疋支子二外紅花小三兩酢一合臺半圍薪卅斤帛一疋支子三外紅花小三兩酢八勺臺小半圍薪六斤絲一絇支子七合紅花小一兩酢五勺臺小半圍薪三斤

藍

同 淺藍色、綾一疋藍半圍黄蘗八兩帛一疋藍半圍黄蘗八兩絲一絇藍小半圍黄蘗

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

831
4

支子

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『衣服志料 2巻』 請求記号 831-4
ガラス使用